バングラデシュ農村の社会開発
―BRAC による貧困女性の組織化

鈴木　弥生
立教大学コミュニティ福祉学部コミュニティ政策学科
E-mail：yayoiasha@rikkyo.ac.jp

佐藤　一彦
元秋田桂城短期大学
E-mail：satok52@yahoo.co.jp

1．はじめに

1971 年のバングラデシュ人民共和国（以下バングラデシュと称す）独立以降、日米を始めとする諸外国は膨大な援助によって大規模な開発を行ってきたが(1)、そこで利益を得ているのはごく少数の既得権益者であり、格差は拡大傾向にある(2)。また、バングラデシュ政府は「貧困緩和」を目的とする政策を掲げてきたが(3)、農村の貧困問題は依然として深刻である(4)。

こうした状況の中、貧困問題の解決を目的としてさまざまな活動を行ってきたのが、BRAC(5)を始めとする現地 NGO である。BRAC は、バングラデシュの中で最大規模を誇る現地 NGO であり、農村に居住する貧困女性の well-being 向上を目的として社会開発の推進に力を入れている。2010 年 1 月現在、BRAC の活動は多岐にわたっているが、農村でのプログラムは、貧困層の生活状態に適した方法を草の根レベルで検討し、必要に応じて改善しながら、プロジェクトの実施と分析を繰り返し行っている。

このような BRAC の手法を「学習プロセス・アプローチ（learning process approach）」として最初に位置づけたのは、コーテンである（Korten 1980）(6)。彼は、先進国が持ち込む一方的な開発計画を「青写真・アプローチ（blueprint approach）」と称し、農村開発の失敗をもたらすと警告していた。これに対して、農村での経験から学習する BRAC の活動内容を「開発の成功例」として評価している。コーテンの先行研究に基づいて、ラヴェル（Lovell 1992）は、BRAC を「学習する組織（learning organization）」と称し、社会開発を推進するうえでの成功モデルとして多岐にわたる活動を紹介している(7)。

実際にも、農村の貧困女性・家族を対象とする活動では、ショミティ（貧困女性が組織化する小グループ）を媒体として、社会開発、保健医療、人権・法的支援、マイクロファイナンス(8)、識字・教育等を結びつける総合的な手法をとっている。草の根レベルでは、貧困女性の立場から社会開発を考え、プログラムの改善や開発を行っている。その背景には、小地域でのプロジェクトの実施と結果の分析、問題改善方法の発見といった独自の学習過程がある。また「貧困層の well-being 向上を目的として総合的なアプローチを行うためには、外国援助に依存するのではなく、自己資金を確保することが必要」(9)という立場を採っている。

これに対して、「NGO の企業化と職員のサラリーマン化」（延末 2001、58–59 頁）として「今日の NGO は、貧困者の福祉のためだけではなく、NGO 職員の生活のために存在する」、「マイクロクレジットを供与する相手はある程度返済能力のある者に限られていき、それは結局、貧しい人々を排除することにつながる」（延末 2001、59 頁）という指摘もある。ダカでも、アーロン（小売店）への出入りが富裕層に限定されていること等から「貧困層の生活状態とは乖離している」と批判する人々も少なからずみられる(10)。しかしながら、こうした批判を受けながらも、農村での活動に携わる職員がどのような経緯で BRAC を選

択したのか、あるいは、農村内での職員による具体的な活動状況については、管見の限りでは明らかにされていない。また、先行研究ではマイクロクレジットの成果に焦点をあてたものが蓄積されているが（Goetz et al. 1996[11]; Khandker 1998[12]; Alamgir; 1999[13]）、継続的な調査に基づく貧困女性の参加や家族関係の変化については、必ずしも明らかにされていない。

そこで本稿は、 BRAC の社会開発プログラム、BRAC 職員及び農村での具体的な活動状況と貧困女性の参加状況を明らかにしたうえで、BRAC による社会開発について分析することを目的とする。調査対象地域は、我々が調査を継続しているクミッラ県ダウドゥカンディ郡[14]を選定している。

2．調査方法

我々は、日米主導による援助・開発が当該地域の貧困層にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにするために、1997 年以降、11 回に及ぶ調査を行っている。 BRAC に関わる実態調査は、2006 年 3 月、2007 年 12 月～2008 年 1 月、2009 年 3 月、2009 年 12 月～2010 年 1 月に行ったもので、調査方法は、首都ダカにあるヘッド・オフィスとクミッラ県ダウドゥカンディ郡エリア・オフィスでの資料収集、職員からの聞き取り調査とアンケート調査（2006 年）、ショミティ・メンバー（以下、メンバーと称す）とその家族構成員からの聞き取り調査（2006～2010 年）、ショミティ延 5 ヵ所（計 3 ヵ所）・メンバー延 115 人（P 村 22 人［2009 年 3 月］、21 人［2010 年 1 月］、P 村スラム 19 人［2009 年 3 月］、23 人［2010 年 1 月］、H 村 30 人［2007 年 12 月］）からの聞き取り調査と P 村スラムをはじめとするメンバーの戸別訪問による[15]。これらの中で、本論は、主として 2006 年 3 月にダウドゥカンディ郡で行った調査内容（対象；職員 30 名、メンバー 10 世帯・57 人）から分析している。なお、調査内容の執筆・公開については、ヘッド・オフィスとダウドゥカンディ郡エリア・オフィス双方で了解を得ている。

3．BRAC の選定理由

2010 年 1 月現在、ダウドゥカンディ郡では 21 の現地 NGO とグラミン銀行が活動している[16]。中でも、BRAC、ASA（現地 NGO）、グラミン銀行がより多くの貧困女性を対象としたショミティ活動を展開していることから、我々は、これら 3 機関とそれぞれの職員及びメンバーを対象とした調査を継続している。それらの調査内容から、ASA とグラミン銀行の貧困女性を対象とする活動は、マイクロファイナンスに特化していることが明らかになっている。これらに対して BRAC は、先にもみたように、貧困女性・家族の well-being 向上を目的として保健医療、人権・法的支援、マイクロファイナンス、識字・教育等を結びつける総合的な手法をとっている。また、バングラデシュ政府と世界食糧計画との協同プログラム IGVGD（Income Generation for Vulnerable Group Development）に参入し、現物支給のみならず、家禽飼育や社会開発に関する研修への最貧困層女性の参加を重視している。さらに、各プログラムの実施状況と結果の分析を通して、プログラムを修正したり、より発展させたりといった独自の学習過程を取り入れている。こうした BRAC のもつ特徴から、本論では、学習プロセス・アプローチの典型例となる BRAC に焦点をあてている。

4．BRAC による貧困女性の組織化

(1) 貧困女性を対象とした社会開発プログラム―well-being 向上を目的として

クミッラ県ダウドゥカンディ郡で BRAC が活動を開始したのは 2000 年である。この年、エリア・オフィスとブランチ・オフィスを構え、2003 年にブランチ・オフィスを 1 カ所加えている。エリア・オフィスは、ダカ−チッタゴン間を結ぶハイウェイ拡張工事に伴い建設されたメグナ・グムティ橋（日本 ODA）から車で約 15 分、Gau ユニオンの中心地・Gau バザールまで徒歩 10 分前後の距離にある。これらのオフィスに配属となったプログラム･オフィサー（Programme Officer；以下 P.O. と称す）は、日々農村や各貧困家庭を訪問する中で、外国援助による開発が盛んに行われてきた当該地域で貧富格差が拡大し、そのしわよせが貧困女性や子どもに及んでいるという状況を把握するようになった。そのため、開設当初から活動範囲を同郡全域に拡大する必要があると

考えていた。しかしながら2006年3月時点でもBRACの活動が同郡の北東部には到達していなかった。こうした課題を克服するためにも、2007年に6カ所のブランチ・オフィスを設置していることから、活動領域は拡大傾向にある。2009年3月現在、同郡は総人口48万1590人で、25ユニオン、419村で構成されているが[17]、BRACは、全ユニオン中約3分の1の村をカバーしている。

さて、農村の社会開発を推進するうえで基本となるショミティは、農村内に伝統的にみられる相互扶助関係を媒体として形成されている。活動は、週に1回、所定の時間・場所（家屋前の空き地）で行われている。その組織化に際して、P.O.は農村や各貧困家庭を訪問し、先ずもって、貧困女性に社会開発の必要性を説明している。また、農村内のショミティ活動を目の当たりにしたり、近隣に居住するメンバーの影響を受けたりする中で、自らメンバーになりたいと申し出る女性もみられる。各メンバーは、ショミティ活動を通して、名前の読み書きや子どもの就学・識字の重要性、ダウリー撲滅といった社会開発について学んだり、メンバー同士で情報交換を行ったりしている。こうした活動に続いて行われているのが、貧困女性のwell-being向上を目的として行われているマイクロファイナンスである。この活動の中で、基礎的かつ重要なプログラムの一つとして位置づけられているのがDABI[18]というプログラムである。このプログラムの融資額は1年間で5,000タカ[19]から3万タカとなっている。融資貸付の対象は屋敷地と農地を合わせても1エーカー未満しか所有していない世帯で、なおかつ、家族の生活を維持するために肉体労働を行っている世帯の女性である[20]。

ダウドゥカンディ郡エリア・オフィスでのDABIの実施状況を概観すると、2005年12月時点のショミティ総数は144、メンバー総数6,594人であった（表1）。その後2006年12月には、

表1　ダウドゥカンディ郡Gauユニオン、エリア・オフィス・DABIプログラムの基本指標

2006年3月現在

	2005年達成数値	2006年達成目標	2006年1月		2006年2月		2006年3月目標
			目標	達成	目標	達成	
①ショミティ数	144	—	—	—	4	—	—
②メンバー数（人）	6,594	2,980	260	100	250	187	260
③P.O.平均担当者数（人）	550	722	566	535	548	548	572
④貯蓄引き出し額（タカ）	−37,544	3,616,050	262,500	206,512	275,200	211,904	302,750
⑤貯蓄している人の割合	82%	96%	82%	82%	82%	82%	85%
⑥貯蓄総額（タカ）	16,457,065	20,073,837	16,962,500	17,110,275	17,237,700	17,322,180	17,540,450
⑦融資の数	5,356	6,151	436	313	490	380	543
⑧融資総額（タカ）	52,971,000	72,303,000	5,250,000	3,403,000	5,504,000	4,261,000	6,055,000
⑨融資を受けている人（人）	4,716	6,786	4,916	4,714	5,116	4,779	5,316
⑩元本（金）未返済（タカ）	2,830,000	35,446,000	28,627,000	28,212,184	29,289,000	28,651,182	30,376,000
⑪滞納総額（タカ）	669,000	534,000	656,200	655,998	643,500	944,438	633,150
⑫返済率（全体）	96%	98%	96%	96%	96%	95%	96%
⑬返済率（最新）	97%	99%	97%	97%	97%	96%	97%
⑭収支（タカ）	2,027,198	2,802,400	225,000	360,305	177,000	155,224	200,000

（注）ショミティはV.O.（Village Organization）、ショミティ組織化及びメンバーと関わる職員はP.O.（Programme Officer）と称されている。

（出所）ダウドゥカンディ郡エリア・オフィス資料に基づき筆者作成。

ショミティ総数は 667、メンバー総数は 3 万 497 人にも拡大している[21]。これらメンバーの中で（2005 年 12 月時点）、融資を受けている人の数は 4,716 人（メンバーのうち 71.5%）、融資の数 5,356、融資総額は 5297 万 1000 タカにも達している。融資は、各メンバーがエリア・オフィスまで出向き、一年分を受け取る。その際、夫を始めとする家族や親戚が保証人として同伴することになっている。これには、治安への配慮の他、夫の意識に働きかけるという意図もある（これら融資に対する利子は 15%、返済回数は 1 年間（52 週）のうち 46 回となっていたが、返済に滞る貧困層に配慮し、2010 年 1 月現在、返済期間を 2 年間に延長している。但し、融資を受けてから 1 年目以降、 6 ヵ月ごとに未返済額に対して 7.5% の利子がつく）。実際の融資の未返済率（2005 年 12 月までの累計）は 4 % であるが、BRAC はこの数値を 2006 年 12 月までに 2 % に引き下げたいと考えている。また、融資を返済できない人に対しての連帯責任は課していない。メンバーの経済状態を考えると、連帯責任が重荷になると判断しているからである。そのため、返済できないメンバーに対して主に P.O. が関わるようになる。だが、融資を返済出来ない人たちの多くは行方が分からなくなっているという。この他、メンバーに対して貯金を奨励しており、2005 年時点で 86% が貯蓄している。

こうした活動と並行して、ダウリー、レイプ、夫による暴力、一方的な離婚、硫酸を浴びせる事件等に焦点をあて、貧困女性の well-being 実現に向けた支援体制を構築している。具体的には、担当職員と農村内のネットワークを通していち早く発生原因を突き止めると同時に、必要に応じて貧困女性に弁護士を紹介し、司法の場に持ち込むという方法を採っている。そのため、全 64 県にある裁判所に、BRAC 専属の弁護士を配置している。

また、バングラデシュ政府及び世界食糧計画との連携により、IGVGD プログラムを実施している。世界食糧計画から分配される余剰農作物は、ユニオン評議会議長・議員を通して、農村に居住する VGD（Vulnerable Group Development）カード保持者（2008 年 1 月現在、同郡で 3,450 人）に供与される。彼女たちは、 1 ヵ月に 32 キロ分の余剰農作物を 2 年間受け取る。だが、BRAC は、こうした供与のみでは最貧困女性の well-being は向上しないと考えている。そこで VGD カード保持者を小グループごとに組織化し、 2 年間に 2 種類の研修（家禽飼育と社会開発）を行っている。その他、VGD メンバーは 1 ヵ月に 32 タカを BRAC に貯蓄している。これらの活動を通して、BRAC 職員は、ユニオン評議会議長・議員による余剰農作物の分配状況も監督している。このプログラムを終えたメンバーは、状況に応じて DABI やエンタープライズ研修（家禽）に移行する。このエンタープライズ研修では、農村内で家禽の病気診断やワクチンン接種を担う女性を育成している。

⑵　ダウドゥカンディ郡エリア・オフィスの職員

2006 年 3 月現在、当該オフィスの職員総数は 39 人、そのうち女性は 7 人 （内 1 人は調理担当）となっている[22]。被調査者の構成は表 2 、調査項目は表 3 、 4 を参照されたい。アンケート用紙の配布は、 3 月 13 日、エリア・マネージャーに依頼している。各職員は、各回答用紙を、 3 月 18 日、エリア・マネージャーもしくは筆者に手渡しているが、我々は、回答用紙の提出を何ら強要していない。その結果、会計 2 人と調理 1 人の計 3 人を除く計 36 人の中で、30 人（女性 4 人、男性 26 人）が回答用紙を提出している。

先ず、年齢をみると（表 3 ）、20 代が 16 人、30 代が 13 人、50 代は 1 人となっていることから、20 代と 30 代に集中していることが分かる。次に勤務年数をみると、最長年数は 20 年（ 1 人）、10 年以上 12 年以内は 5 人である。これに対して、勤務年数 5 年以内の職員は 15 人で、その中の 8 人は 2 年以内となっている。

続いて 29 人の最終学歴（ 1 人無記入）をみると（表 3 ）、全員が高等学校以上の学歴を有している。そのうちわけは、修士号取得者 9 人、学士取得者 13 人、高等学校卒業者 7 人となっている。その中で、各マネージャー、社会開発担当職員、スーパーヴァイザーの計 5 人はいずれも修士号取得者である。それぞれの勤続年数をみると、最長で 6 年 4 ヵ月、続いて 3 年 6 ヵ月、 2 年 8 ヵ月となっているが、その他 2 人は、いずれも 1 年 2 ヵ月という短い年数である。IGVGD・TUP（Targeting the Ultra Poor）スーパーヴァイザーもその 1 人である（このプログラムは彼に一任されていることから、意欲と責任感は、 1 年 2 ヶ月とは

表 2　ダウドゥカンディ郡 Gau ユニオン、エリア・オフィスの職員構成（男女別人数）

2006 年 3 月

職種	職員の数（人）		
	合計	女性	男性
エリア・マネージャー	1	0	1
DABI（うち 1 人はマネージャー）	13	5	8
Enterprise Development（うち 1 人はマネージャー）	11	0	11
Micro Enterprise Lending and Assintance（うち 1 人はマネージャー）	3	0	3
社会開発	1	0	1
IGVGD、TUP（うち 1 人はスーパーバイザー）	4	0	4
保健	3	0	3
会計	2	1	1
調理	1	1	0
合　　計	39	7	32

（注）IGVGD は Income Generation for Vulnerable Group Development、TUP は Training the Ultra Poor の略語である。

（出所）当該オフィスのエリア・マネージャーからの聞き取り調査に基づき筆者作成。

思えないほどのものであった)[23]。他の P.O. と比較すると、彼ら 5 人の平均勤続年数が長いとは言えないのであるが、各業務内容と運営については彼らに一任されている。そのために、彼らは BRAC の研修を受講しており、そこで多くを学んでいると述べている。

また、宗教別にみると（表 3）、イスラーム教徒 22 人（女性 2 人、20 人）、ヒンドゥー教徒 8 人（女性 2 人、男性 6 人）となっている。ここから、BRAC の職員採用がイスラーム教徒に偏っていないということが分かる。

では、職歴をみてみよう（表 3）。特徴的なことは、失業状態 12 人、職業なし 1 人の計 13 人が何ら職に就いていなかったということである（学生 4 人、無記入 2 人を除く）。このことに関連して「BRAC での仕事を選択した理由もしくは背景」（自由記述であるが、複数回答なし）とあわせみると、これら 13 人全てが「バングラデシュでは失業が深刻な問題となっているが、職探しをする中で、BRAC の採用試験に臨んで合格した」と回答している。この他、5 人が「サラリーのため」と回答している。これに対して、30 人中 5 人が「BRAC で仕事をしたいということは明確だった」、4 人が「貧困層と共に仕事がしたい」と回答している。前者 5 人のうち、4 人は BRAC 関係の仕事（3 人が小学校教員、1 人は保健関係）に従事していたが、かねてから P.O. への昇進を希望していた。他 1 人は現地 NGO に勤務していたが、給与を含むシステムや研修制度に魅力を感じて BRAC に転職したと述べている。さて、各職員が BRAC を選択した理由は、必ずしも「農村での社会開発に尽力したい」というものではない。このことについて聞き取り調査を行ったが、「年金や公的休暇等、福利厚生が格段に良い政府役人の職を希望していた。しかし、我々には政府機関に就職出来るような縁故関係や資産はなかった。縁故関係とは無関係で、なおかつ公正に行われる BRAC の採用試験は、我々にとって有利だった。そして、BRAC で仕事をするようになってから自分自身も成長している」と回答する職員もみられた。

さらに「あなたはこの仕事が好きですか」に対して 30 人（全員）、「あなたはこの仕事に誇りを持っていますか」に対して 25 人が肯定している。そこで具体的な回答をみると、「農村でさまざまな機会を剥奪されている人々と共に仕事ができる」という内容が最も多く（11 人）、次いで、「さまざまなプログラムが行われている」（6 人）と

表 3　ダウドゥカンディ郡 Gau ユニオン、エリア・オフィスの職員

（性別、年齢、勤続年数、最終学歴［学位］、宗教、職歴、2006 年 3 月）

職　　種	性別	年齢	勤続年数	最終学歴、もしくは学位	宗　教	職　　歴
①　エリア・マネージャー	男性	30	2 年 8 ヵ月	修士	イスラーム	現地 NGO
②　マネージャー（ED）	男性	34	6 年 4 ヵ月	修士	ヒンドゥー	（学生）
③　マネージャー（MELA）	男性	33	1 年 2 ヵ月	修士（イスラーム歴史学）	イスラーム	BRAC 関係
④　社会開発	男性	35	3 年 6 ヵ月	修士	イスラーム	海外出稼ぎ
⑤　スーパーバイザー（IGVGD、TUP）	男性	27	1 年 2 ヵ月	修士（地理学）	イスラーム	会社員（マーケティング）
⑥　IGVGD	男性	27	1 年 7 ヵ月	学士	ヒンドゥー	なし
⑦　プログラム・オフィサー	女性	28	9 年 6 ヵ月	学士	イスラーム	（失業状態）
⑧　プログラム・オフィサー	女性	35	6 年 3 ヵ月	学士	ヒンドゥー	（失業状態）
⑨　プログラム・オフィサー	女性	32	4 年 3 ヵ月	高等学校卒	ヒンドゥー	（失業状態）
⑩　プログラム・オフィサー	女性	25	1 年	高等学校（科学）卒	イスラーム	BRAC 保健
⑪　プログラム・オフィサー	男性	50	20 年	高等学校卒	イスラーム	（失業状態）
⑫　プログラム・オフィサー	男性	38	12 年 3 ヵ月	高等学校卒	イスラーム	ビジネス
⑬　プログラム・オフィサー	男性	38	10 年 3 ヵ月	学士	イスラーム	（無記入）
⑭　プログラム・オフィサー	男性	36	10 年 3 ヵ月	（無記入）	イスラーム	BRAC 学校教師
⑮　プログラム・オフィサー	男性	35	10 年	学士	ヒンドゥー	（失業状態）
⑯　プログラム・オフィサー	男性	34	10 年	学士	ヒンドゥー	（失業状態）
⑰　プログラム・オフィサー	男性	27	6 年 4 ヵ月	高等学校卒	ヒンドゥー	会社員
⑱　プログラム・オフィサー	男性	36	4 年	修士（経済学）	イスラーム	（失業状態）
⑲　プログラム・オフィサー	男性	28	4 年 3 ヵ月	高等学校卒	イスラーム	（失業状態）
⑳　プログラム・オフィサー	男性	30	4 年	学士	イスラーム	Private Job
㉑　プログラム・オフィサー	男性	20	2 年 3 ヵ月	修士	イスラーム	（失業状態）
㉒　プログラム・オフィサー	男性	28	1 年 4 ヵ月	高等学校卒	イスラーム	（失業状態）
㉓　プログラム・オフィサー	男性	28	1 年 2 ヵ月	修士（数学）	イスラーム	（失業状態）
㉔　プログラム・オフィサー	男性	27	1 年	学士	イスラーム	（無記入）
㉕　プログラム・オフィサー	男性	27	1 ヵ月	修士（政治学）	イスラーム	（失業状態）
㉖　プログラム・オフィサー	男性	26	（無効回答）	学士（経済学）	イスラーム	BRAC 学校教師
㉗　プログラム・オフィサー	男性	29	（無効回答）	学士	イスラーム	HIV/AIDS 関係
㉘　プログラム・オフィサー	男性	27	（無効回答	学士	ヒンドゥー	（学生）
㉙　プログラム・オフィサー	男性	25	（無効回答）	学士	イスラーム	（学生）
㉚　プログラム・オフィサー	男性	25	（無効回答）	学士	イスラーム	（学生）

（出所）当該オフィスの職員を対象に行ったアンケート調査に基づき筆者作成

なっている。そのうち 1 人は「BRAC は、農村で最も困難な状態におかれている人々に対して多くの活動を展開しているが、その中で彼女・彼ら自身が生活状態を改善している。仕事をする中で、そのことに関心が深まるようになった」と述べている。

そして、仕事で直面する困難について、「ショミティの組織化」（10 名）、「貯蓄に関する問題」（3 人）、「保健問題への関心が低く、アドバイスしても無視される」（3 人）等、社会開発を進めるうえでの対応が中心になっている。

「困った時には誰に相談しますか、相談内容」について、「エリア・マネージャーに相談している」が 17 人と、最も多くなっている。そのうち 13 人は「エリア・マネージャーのみならず他の職員にも相談している」と回答している。中でも、社会開発担当職員は「仕事内容、企画、さまざまな問題の解決方法について、エリア・マネージャーや同僚に相談している。彼らはいつも相談に応じ、私の仕事を支援してくれる」と回答している。当該オフィスでは、打ち合わせや情報交換等も密であり、連携の良さを伺うことが出来る。

そして、「あなたの関心がある事項について意見を記述してください」（表 4）で多くみられたのは、「BRAC が学習する組織であり、日々農村に入り貧困女性とコミュニケーションをとっている」ということである。

さて、各職員による BRAC の選択理由は、必ずしも、貧困層の well-being 向上に尽力する、あるいは、農村の社会開発を推進する、といったものではない。よって、志望動機をみる限り、延末による「今日の NGO は職員のためにも存在す

表 4　関心があること（自由記述）

調査項目
あなたの関心があることについて意見を書いてください i　貧困女性たちは、あなたたちの活動を通してどのように変化しましたか　ii　農村の貧困女性を組織化した背景、あるいは、ジェンダー・ギャップ改善に着手した背景（理由）、iii　社会開発における BRAC の役割、活動をするうえで困難なこと、iv　バングラデシュ政府との関係、v　その他
回答
・BRAC は学習する組織であるということを先ずもって伝えたい。ここでは、誰もが農村に出向き、貧困層から学び、また、多くの知識を得ている。貧困女性はたくさんの活動を通して彼女たちの生活を向上させている。 ・BRAC の役割は、農村に居住する貧困層の発展と女性の権利獲得に向けた法的支援、ショミティの組織化とマイクロクレジット、研修を行うことである。 ・貧困女性が生活を向上させるためには、私自身の関わり方も重要で、困難に立ち向かわなければならない。ジェンダー・ギャップの改善に向けて、農村を回って貧困女性と話をすることは重要なことである。農村の社会問題を解決するために、BRAC は、研修、法律、教育等さまざまな社会開発の分野で仕事をしている。 ・BRAC は学習する組織であると同時に、職員はそれぞれの農村に入り、貧困層とたくさんのコミュニケーションをとっている。貧困層は、私たちの話に傾聴している。そのため、貧困層は、経済状態のみならず、識字・教育、衛生状態も徐々に変化させており、そのことで生活がより満たされるようになっている。また、私たちは、ジェンダー・ギャップ改善に向けて日々努力している。農村の貧困女性は、みじめな無視された状態におかれている。BRAC は、そのような女性たちの生活向上や発展のために仕事をしている。 ・農村に居住する貧困女性は、BRAC の活動を通して生活を向上させている。職員には、規律、人間性、時間厳守が求められている。私たちは早朝から農村を回っているが、休憩時間は 13 時から 15 時までとなっていて、その後も農村に出向き、貧困層と話をしている。中でも困難なことは、農村に居住するさまざまなリーダーとの対応である。 ・さまざまな地域でさまざまな人々とコミュニケーショをとることは難しいが、貧困層の生活改善に向けて日々農村を回っている。こうした活動を続ける中で、私自身のタイム・スケジュールも変化し、早朝からよく仕事をするようになった。 ・政府との関係は良い（複数）。

（出所）当該オフィスの職員を対象に行ったアンケート調査に基づき筆者作成

る」という指摘も適切と言えよう。しかし、重要なことは、農村内の社会問題に直面する中で、BRAC職員自身も貧困層の生活改善に向けての問題意識を高めているということである。このことについて、職員たちは「今、我々に出来ることは、農村に入り、人々の内発性にいかに働きかけるかということだ。日々そのことを考え、行動することだ。そして、村にはびこる社会的不公正と闘うこと。BRACがみているぞ！と権力者たちに活動を通して訴え続けることだ」と述べている。

さいごに、クミッラ県広域オフィスのマネージャーからの聞き取り調査（2006年3月）の一部を引用しよう。彼はバングラデシュ北部の貧しい農村の出身であるが、彼の世帯は、貧困とは無縁であった。そのため「かつては、近くにあった貧困を見ようともしなかった。自分たちの生活は上であると考えていた。けれども、今は、彼・彼女らと一緒に両足を水につけて貧困問題の解決を考えている。この仕事をする中で自分自身も鍛えられている。政府役人のような、なまぬるい仕事はしていない。貧困層と我々がどのように関わり、どのように支援してゆくのか。我々は、そのことに対して責任を持っている。そして、そのような仕事を誇りに思っている」と述べている。

⑶　ショミティ・メンバー（ダウドゥカンディ郡Gauユニオン）

①　メンバーの生活状態―2006～2010年

表5は、ダウドゥカンディ郡エリア・オフィスのメンバー10人から行った聞き取り調査（2006～2010年）に基づき、各メンバーと家族構成員の概要（年齢、就学・識字、職業等）、土地所有状況、メンバーになったきっかけ・周囲の反応、メンバーとの関係・困った時に相談する人、融資額と融資の活用状況等についてみたものである。なお、ここでのメンバーの選定は、当該オフィスの職員が行っている。

これらの中で、事例1～5までの5人はDABI・メンバー、事例6～10はエンタープライズ・メンバー（家禽）である。後者の中で、事例6、7、9はDABI・メンバーを兼ねている。

先に事例1～5のメンバーについてみると、事例1～3の3世帯は農地を全く所有していない。また、彼女たちは就学経験がないので、ショミティ活動を通して自分の名前の読み書きや紙幣の数え方を習得している。事例4、5の2人は、それぞれ、クラス3、クラス4までの就学経験があり、手紙の読み書き、新聞読解、計算等を習得している。

これら5人の融資活用状況をみると、事例1と5の2人は夫の店開業資金にあてている。それ以前の夫の職業は、2人とも日傭の農業労働者であった。援助・開発によって近代農法が推進された当該地域では雨期の農業労働者としての雇用機会が激減しており、乾期でもそれらは減少傾向にある。こうした背景から、両世帯とも、融資を受ける以前は1年を通して現金収入を得られなかったが、夫の店開業以降、各世帯の経済状態が向上している。とりわけM（事例1）は、店の収益金から一部を受け取り、牛や家禽を購入して飼育・販売しながら自らも現金収入を得ている（後述参照）。その他の世帯にみる融資活用状況は、夫に同伴してのサリー行商（事例2）、農地借用による稲作[24]、乳牛購入、長男の海外出稼ぎ渡航費用（事例3）、家禽購入予定（事例4）となっている。

次に、エンタープライズ・メンバー5人の就学・識字についてみると、事例6はクラス8まで、その他4人はクラス10以上の就学経験を有しており、何れも手紙の読み書きから新聞読解に至るまでを習得している。

そこで融資活用状況をみると、事例9は電気店の資金（生前父が経営、現在兄が経営）、事例6は魚養殖、農地借用による稲作と野菜栽培、事例7は兄の店開業資金にあてている。これら3世帯の中で、事例9が母子世帯であり、数年前までVGDに指定されていた。この世帯では、2002～03年頃父親が他界した。残された家族構成員の中で唯一の男性は兄（長男・既婚）であったが、経済的支援を得られない状況にあった。そのため、K（事例9）は母親と2人の妹計4人の母子生活を維持するために刺繍の仕事を始めたが、1日4～5時間の労働に対して、1ヵ月の現金収入は1,000タカ程度にしかならなかった。その頃、BRACのP.O.が彼女の家庭を訪問したことをきっかけとして、2年間IGVGDプログラムに参加した。その後、家禽ワクチン接種を通して家族のwell-beingを向上させたいという思いから、エンタープライズ研修に参加するようになった（2006年）。そこで他のメンバー、とりわけRa（事例10）から刺激を受けるようになった。こうした状況の中、2009年以降P.O.としての職を

得るまでに発展している。そして 2010 年 1 月現在も、Ra は彼女の相談に応じている。

Ra（事例 10）自身は、P.O. が奨励する農村の社会開発に関心を持ち、ユニオン評議会議長の反対を押し切って 2 ヵ所の DABI・ショミティ組織化に尽力した（2001 年）。その後融資を活用して稲作や乳牛の飼育を経験したが（2002 年）、生活が向上したことから融資を終えている。そして 2004 年以降 BRAC の保健ボランティア、2006 年以降エンタープライズ研修に参加するようになり、2010 年 1 月現在もそれらの活動を継続している。そのうえ、自身も現地 NGO 職員（2005 年）となって社会開発の推進に尽力している。具体的には、早婚やダウリーを撲滅するための直接的な介入の他、子どもの就学・識字の重要性、トイレ使用等について具体的に提示している。また、R（事例 8）も DABI・ショミティ組織化とショミティ活動を経験しているが、融資を受けたことはない。その後、養鶏の知識が豊富な彼女に対して（兄が養鶏ビジネスを行っている）、P.O. がエンタープライズ研修への参加を勧めた。2006 年 3 月現在、エンタープライズ・リーダーを務めている。

これら 2 人の女性たちは貧困層の出身ではないが（表 5 参照）、P.O. が農村の社会開発の重要性について伝えたり、ショミティの組織化を勧めたりしたことから、 BRAC と関わるようになった。彼女たちは、各世帯の well-being 向上のみならず、農村居住者にさまざまな知識や情報を提供し、農村内部から社会問題を解決してゆくキーパーソンとしての役割を担っている。農村内の社会開発を推進するために、さまざまな層に働きかけていることも BRAC の特徴の一つと言える。

さて、メンバー 10 人に対して行った聞き取り調査から「メンバーになること、あるいはショミティ組織化に際しての周囲の反応」についてみると、「Ra（事例 10）が居住していた農村のユニオン評議会議長が反対を表明した」以外、全員が「何ら反対はなかった」と回答している。また、メンバー同士の関係はいずれも良好である。困った時に相談する人は、「家族」が 7 人（内、既婚者 6 人）で最も多くなっている。メンバー間での情報交換についてみると（表 6）、貧困層にあっては、メンバーの関心が先ずもって生活向上に向けられていることが分かる。それは、子どもへの教育とも密接に結びついている。子どもの就学・識字や子どもの労働についてどのように考えているのかをみると（表 7）、経済的理由から就学できなかったというM（事例 1）と J（事例 2）は、「自らが不利な状態を被っているがゆえに子どもに教育を受けさせたい」と強調していた。Mは、融資を受ける以前に自分の名前さえ書くことができなかったことから、非識字の不自由さを痛感したと言う。 J は、文字の読み書きができない自らの状況を目が見えない状況に例えている。他のメンバーをみても、女児・男児を問わず就学・識字への関心は高くなっている。では、このような子どもの就学・識字への希望はどれほど達成されているのであろうか。先ず、融資を受けて 1 年以上経過している全世帯が、「現金収入が増えた」と回答している。そこで、それら現金収入の使途をみると、メンバーの殆どが、融資によって増えた現金収入を食費のみならず教育費に支出していることが分かる。中でも、事例 5 のNは、融資を受けてから、就学期にある 3 人の子どもそれぞれに家庭教師をつけている。

さらに、「夫（未婚者の場合家族構成員）はあなたがメンバーになったことを喜んでいますか」という質問に対して、全メンバーが肯定している。そこで「何を喜んでいるのか」についてみると、「妻が融資を受けてから生活が向上したことを喜んでいる」という回答が多くなっている。こうしたことは、従来の夫妻関係にも影響を及ぼしている。そして、貧困世帯 8 世帯のうち 7 人の既婚女性が「融資を受けるようになってから夫の態度が優しくなった」と回答している。そして、そのうちの 5 人が、「家庭内で自分の意見を主張するようになり、家庭内の決定権に変化が見られるようになった」と回答している（表 8）。ショミティ組織化に尽力したR（事例 8）と Ra（事例 10）は、農村の社会変革に向けて自らの意見を主張している。

さいごに、BRAC はダウリーの慣習をなくしてゆくことにも力を入れているが、それを反映するかのように、全回答者が「ダウリー反対」を唱えている。また、既婚者 9 人は結婚時にダウリーは持参していないし、夫側からも要求されていないと回答している。中でも Ra（事例 10）は、既得権益者と貧困層の双方に対して、ダウリー撲滅を訴えている。

表5　ダウドゥカンディ郡 Gau ユニオン、エリア・オフィスのメンバー 10 世帯・57 人

事例	名前	年齢（歳） 就学・識字	職業・労働時間 （労働日数） 収入（タカ） ／1 日 ／1 週 ／1 ヵ月平均	土地 ① 屋敷地 ② 農地（取得方法もしくは喪失理由）・作物	① メンバーになったきっかけ（年） ② 周囲の反応 ③ メンバーとの関係 ④ 困った時相談する人
1	M本人	35　不就学 自分の名前の読み書き 紙幣を数える	融資前―家事労働 融資後―家事労働、家禽飼育 乳牛 1 頭、鶏 6 羽、ヤギ 7 頭、アヒル 12 羽（本文参照）	① 12 ショタンショ（義父より相続） ② なし	① P.O.の家庭訪問（2003 年） ② 反対なし ③ 良好 ④ P.O.
	J 夫	45　C7 名前・手紙の読み書き 新聞読解 計算	融資前―日傭の農業労働者 融資後―果物の小売店 6–20 時まで		
2	J本人	30　不就学 自分の名前の読み書き 紙幣を数える	融資前―家事労働 融資後―家事労働、サリー行商、ヤギ飼育 サリー行商（夫に同伴） ヤギ飼育、2 頭 600 タカで購入。人工授精 100 タカ／1 頭、毎年 2–3 頭売却、利益―500～1,000 タカ／1 頭	① 5／8 カニ（義父より相続） ② 8 カニ 夫の兄弟 2 人、姉妹 3 人の計 6 人で共同使用。米、じゃが芋、ゴマ、他栽培。自家消費。余剰作物は販売	① P.O.の家庭訪問（2006 年） ② 反対なし ③ 良好 ④ P.O.、大きな問題の場合、エリア・マネージャー
	A夫	35　SSC 名前・手紙の読み書き 新聞読解 計算	融資前・後―サリー行商 仕入れ―1 万～1 万 5,000 タカ分 利益―2,000～3,000 タカ 雨期に船使用–料金 150–200 タカ／1 日 雨天時休み、乾期のほうが利益多い 6 ～10 時に開始、15 時～夕方に終了 融資後―バザールの店貸店舗（利益少額）		
3	H本人	42　不就学 自分の名前の読み書き 数字の 1～10 まで分かる	融資前・後―家事労働	① i 25 ショタンショ（義父より相続） ii 25 ショタンショ売却（長男出稼ぎ費用工面、義弟裁判費用） ② 4 カニ（義父より相続）	① 近隣居住者（メンバー）の話や活動状況を通して関心を持った（2003 年） ② 反対なし ③ 良好 ④ 夫
	R夫	55　SSC 名前・手紙の読み書き 新聞読解 計算	融資前・後 乾期―農業　8–13 時、14 日／1 ヵ月 牛の世話　午後 大工　100 タカ／1 日　12 日／1 ヵ月 雨期―大工　8–13 時、14–17 時 20–25 日／1 ヵ月		

マイクロファイナンス（年） ①　金額（タカ） ②　返済額（タカ/ 1 週間） ③　貯蓄（タカ/ 1 週間） ④　活用方法	家族構成員の生活状態 ①　家族構成員（年齢［歳］、就学・識字、職業） ②　援助との関係（FFW プログラム、VGF プログラム、JICA、大洪水、その他） ③　近隣同士での支援関係
i　2003 年 ①　6,000 タカ ②　150/ 1 週×52 回　　③　20/ 1 週×52 回 ④　子どもの教育費。夫のビジネス。その利益で肉牛（4,000）購入し 1 万 5000 タカで売却。 ii　2004 年 ①　8,000 タカ ②　200/ 1 週×46 回 ④　夫のビジネス。利益は妻が受け取る。 6,000 で牛購入し、飼育中。 iii　2005 年 ①　1 万タカ ②　250/ 1 週×46 回　　③　20/ 1 週×46 回 ④　夫のビジネス、利益は妻が受け取る。 利益で教育費。家禽購入して飼育（本文参照）	①　家族構成員 長女　12　C3 長男　8　M1 ②　援助との関係 VGF プログラム、米 10kg/ 1 ヵ月× 4 年 ③　近隣同士での支援関係 日常的にある
i　2006 年 3 月 18 日 ①　8,000 タカ ②　220/ 1 週×46 回 ③　20/ 1 週×46 回 ④　ビジネス。ヤギ、鶏購入予定	①　家族構成員 長男　15　C9 長女　10　C6 二男　7 三男　4 ②　援助との関係 VGF プログラム 1998 年の大洪水時、米 10kg ③　近隣同士での支援関係 日常的にある
i　2003 年 ①　5,000 タカ ②　125/ 1 週×46 回　　③　10×46 回 ④　農地借用 ii　2004 年 ①　9,000 タカ ②（無効回答）　③（無効回答） ④　雌牛 9,000 で購入し、牛乳を自給。その後 1 万 6,000 で売却 iii　2005 年 ①　1 万 3,000 タカ　②（無効回答） ②　③（無効回答） 農地借用、長男の海外出稼ぎ費用工面	①　家族構成員 長男　18　C8　サウジアラビア、マドラッサでヘルパー　5,000〜6,000 タカ/ 1 ヵ月、長男からの仕送り―2 年間で 15 万タカ（海外出稼ぎ費用 16 万タカ） 長女　15　C10 まで（SSC 受験していない）、家事労働、夫は海外出稼ぎ準備（サウジアラビア） 二女　12　C7 まで（勉強嫌いで退学） ②　援助との関係 なし ③　近隣同士での支援関係 日常的にある

事例	名前	年齢（歳） 就学・識字	職業・労働時間 （労働日数）　収入（タカ） ／1日 ／1週 ／1ヵ月平均	土地 ① 屋敷地 ② 農地（取得方法もしくは喪失理由）・作物	① メンバーになったきっかけ（年） ② 周囲の反応 ③ メンバーとの関係 ④ 困った時相談する人
4	A本人	30　C3 手紙の読み書き 新聞読解 計算	融資前―家事労働 融資後―家事労働、牛飼育予定	① 1と1／4カニ 家庭にグァヴァの木。その他、うり、豆、ラターユ、なす栽培。殆ど自家消費。 ② なし	① 夫が近隣居住者（メンバー）から話を聞きつけ妻に勧めた（2006年） ② 周囲の反対なし ③ 良好 ④ 夫
	M夫	40　不就学 文字の読み書きできない 紙幣数えられない	融資前・後 乾期　日傭の農業労働者 8–13時、15時–日没前　100タカ／1日 雨期　砂運搬　6–12時　100タカ／1日		
5	N本人	30　C5 手紙の読み書き 新聞読解 計算	融資前・後―家事労働	① 35ショタンショ（10―義父より相続、20–15年前10万タカで購入） ② なし	① 近隣居住者（メンバー）の話を聞いて関心を持った。その後P.O.に直接交渉（2005年1月） ③ 反対なし ④ 良好 ⑤ ショミティー・リーダー、P.O.
	A夫	40　C7 手紙の読み書き 新聞読解 計算	融資前―日傭の農業労働者 融資後―食品の小売店（茶、米、ビスケット、豆、ジュース等） 7–22時（13–14時休憩） 生活費―1,000タカ／1ヵ月余裕有		
6	P本人	30　C8 手紙は読めるが書けない 簡単な計算が出来る	融資前―家事労働 融資後―家事労働、魚養殖、稲作、野菜栽培 融資2年後―エンタープライズ・メンバーカレッジ、メッセンジャー	① 11ショトク（義父より相続） ② 40ショタンショ・じゃが芋8モンド、米25モンドを自家消費。	① 近隣居住者（メンバー）の影響を受け、エリア・オフィスに出向いてP.O.に依頼（2004年） ② 反対なし ③ 良好 ④ 夫
	M夫	40　C9 手紙の読み書きが出来る 新聞が読める計算が出来る	8–16時 2,400タカ／1ヵ月		
7	N本人	22　C10 手紙の読み書き 新聞読解 計算	融資前―家事労働 サンダル刺繍　8–11時、15–20時 500～600タカ／1ヵ月 融資1年後―家事労働、エンタープライズ・メンバー、養鶏ワクチン予定	① 18ショタンショ（義父より相続） ② 8ショタンショ・トマト、なす、とうがらしを栽培して自家消費。	① P.O.の家庭訪問（2005年）。 ② 反対なし ② 良好 ④ 母親、夫、一番上の兄
	M夫	30　C5 手紙の読み書き 新聞読解 計算	乾期　砂、レンガ運搬（小型トラック） 7–20時　1,200タカ／1週間 雨期　土砂運搬（船） 6～14時　1,000タカ／1週間 常時仕事があるわけではない		

マイクロファイナンス（年） ①　金額（タカ） ②　返済額（タカ/1 週間） ③　貯蓄（タカ/1 週間） ④　活用方法	家族構成員の生活状態 ①　家族構成員（年齢［歳］、就学・識字、職業） ②　援助との関係（FFW プログラム、VGF プログラム、JICA、大洪水、その他） ③　近隣同士での支援関係
i　2006 年 3 月 18 日 ①　6,000 タカ ②　150/1 週×1 年間 ③　25/1 週×1 年間 ④　牛 1 もしくは 2 頭購入予定	①　家族構成員 長男　15　C1 まで　勉強嫌い（両親で叱り手をあげたが登校せず） 乾期―日傭の農業労働者、父親に同伴（苗植え、草取り他） 100 タカ/1 日 雨期―仕事なし 二男　4 長女　1 ②　援助との関係 1998 年大洪水時、1.5kg の米、ユニオン評議会議員が船で配給 ③　近隣同士での支援関係 夫不在時 100～200 タカの範囲内で貸し借り、夫帰宅後返却
i　2005 年 3 月 ①　5,000 タカ ②　125/1 週×46 回　③　15/1 週×46 回 ④　夫―店の開業資金 ii　2006 年 3 月 13 日 ①　1 万タカ ②　250/1 週×46 回　③　15/1 週×46 回 ④　店の資金	①　家族構成員 長男　18　C6 まで、父親の店手伝い（それ以前無職） 二男　15　C6 長女　12　C5 三男　9　C3 ②　援助との関係 なし ③　近隣同士での支援関係 融資を受けるようになってから借りることがなくなった
i　2004 年 ①　1 万 5,000 タカ ②　375/1 週×46 回　③　50/1 週×46 回 ④　稲作、野菜栽培、魚養殖 ii　2005 年 ①　2 万 5,000 ②　650/1 週×46 回　③　100/1 週×46 回 ④　魚養殖、稲作、野菜栽培、夫の弟に貸出し（1 万 5,000）	①　家族構成員 長男　15　M5 二男　10　C3 長女　7　C1 二女　5 ②　援助との関係 なし ③　近隣同士での支援関係 日常的にある
i　2005 年 ①　5,000 タカ ②　125/1　週×46 回　③　25/1 週×46 回 ④　兄（長男）―店の開業資金	①　家族構成員 長男　8　KG 長女　6 二男　5 ②　援助との関係 なし ③　近隣同士での支援関係 米の貸し借り

事例	名前	年齢（歳） 就学・識字	職業・労働時間　　収入（タカ） （労働日数）　　／1日 ／1週 ／1ヵ月平均	土地 ① 屋敷地 ② 農地（取得方法もしくは喪失理由）・作物	① メンバーになったきっかけ（年） ② 周囲の反応 ③ メンバーとの関係 ④ 困った時相談する人
8	R本人	19　C10 手紙の読み書き 新聞読解 簡単な計算 （15歳で結婚）	メンバー前―家事手伝い（生活費・兄負担） メンンバー後―復学（C9） 2005～2006年　エンタープライズ・リーダー、農村居住者に対して養鶏の知識普及、養鶏ワクチン予定 家庭教師　1,200タカ/1ヵ月 7－9時　12名、16–18時　7人 小学校のベンガル語教師 9–15時　500タカ/1ヵ月	① 2カニ（兄が実父より相続した土地） ② 5－6カニ（実父が残した土地）、貸出し。収穫物の半分を地代として受け取る。米、じゃが芋、とうもろこし、マスタードを栽培。	① P.O.が彼女に対してショミティの組織化を勧めた（2001年、もしくは、2002年頃） ② 周囲の反対なし ③ 良好 ④ 兄（長男）
	M夫	45？　HSC マレーシア留学	マレーシアの会社勤務 仕送り総額　85万タカ/4年間 全学貯蓄（家屋建設予定）		
9	K本人	20　SSC 手紙の読み書き 新聞読解 計算 （未婚）	以前―VGDメンバー 父親他界後から刺繍 4－5時間/1日 1,000タカ/1ヵ月 2006年　エンタープライズ・メンバー、養鶏ワクチン予定 2009年　P.O.　2,500タカ/1ヵ月	① 45ショタンショ ② 30ショタンショ（共同使用）、20～25モンドの米を収穫し、家族で自家消費。	① P.O.の家庭訪問（2000年、もしくは、2001年頃） ② 周囲の反対なし ③ 良好 ④ 母、姉（長女）
10	Ra本人	30　HSC 手紙の読み書き 新聞読解 計算	融資前―保険会社（収入は、契約次第） 融資後―稲作、乳牛飼育 2004年～保健ボランティア 600タカ/1ヵ月 2005年～現地NGO職員 1,800タカ/1ヵ月	① 9ショタンショ（義父より相続） ② 180ショタンショ–大家族で共同使用。米30モン自家消費。余剰分販売。じゃが芋、とうもろこし栽培。その他、18ショタンショ購入－2万6,000タカ。	① P.O.がショミティの組織化を勧めた（2001年） ② ユニオン評議会議長が反対 ③ 良好 ④ 夫
	M夫	33　修士号	2006年～エンタープライズ・メンバー 保険会社（収入は、契約次第） ショッピング・バッグ製造会社 カレッジ非常勤講師（数学） 2人の生活費―5,000～6,000タカ 貯蓄　1,000タカ/1ヵ月 （以上、2006年） 大学教員（常勤雇用、2010年）		

（注）1：P.O.はProgramme Officer、FFWはFood for Works、VGDはVulnerable Group Development、VGFはVulnerable Group Feeding、Cはクラス、SSCはSecondary School Certificate、KGはKindergarten、Mはマドラッサ、TBはTuberculosisの略語。
2：土地の単位は、1エーカー≒3カニ、12クニ、100ショタンショ、100ショトクとなっている。
（出所）当該オフィスのメンバーからの聞き取り調査に基づき筆者作成。

マイクロファイナンス（年） ①　金額（タカ） ②　返済額（タカ/ 1 週間） ③　貯蓄（タカ/ 1 週間） ④　活用方法	家族構成員の生活状態 ①　家族構成員（年齢［歳］、就学・識字、職業） ②　援助との関係（FFW プログラム、VGF プログラム、JICA、大洪水、その他） ③　近隣同士での支援関係
融資（①②）なし ③　50/週×46 回（2001 年もしくは 2002 年頃より継続）	①　家族構成員（元） 父親　他界（小学校教諭） 母親　父親が他界した 1 年後に他界（家事労働） 長男　45、医師、妻は家事労働、長男 14　C6、長女　10　C5 長女　43　C6　既婚 二女　40　高校(HSC なし)、BRAC 関係(TB プログラム) 二男　35-36　C10(SSC なし)、サウジアラビア、海外出稼ぎ 三男　27-28　C10(SSC なし)、養鶏ビジネス 三女　24-25　HSC、BRAC 職員(ヘルス・センター) 四女　年齢不詳(生後すぐに母方姉妹の養女となる) 五女（本人） ②　援助との関係　なし ③　近隣同士での支援関係　日常的にある。食事を分け合う
i　(VGD メンバー) ①　4,000 タカ ②　100/ 1 週×46 回　　③　20/ 1 週×46 回 ④　父―電気店の資金 ii ①　7,000 タカ ②　175/ 1 週×46 回 ④　電気店の資金	①　家族構成員 父親　55 歳で他界(2002-2003 年頃)、電気関係の店、10-22 時まで労働、8,000-9,000 タカ/ 1 ヵ月 母親　家事労働、BRAC のメンバー 長男　SSC　電気関係の店、妻は家事労働、男児　7　KG、女児　1 長女　25　C8　保険会社、2,000 タカ/ 1 ヵ月、BRAC メンバー 二女　本人 三女　18　C7　家事労働（母親の手伝い） 四女　16　C7　衣類縫製品工場（チッタゴン）、12 時間労働/ 1 日、2,500 タカ/ 1 ヵ月、夫同工場（品質管理）、3,000 タカ/ 1 ヵ月 ②　援助との関係　VGD プログラム、米・小麦の支給/ 2 年間 ③　近隣同士での支援関係　日常的にある
i　2002 年 ①　5,000 タカ ②　125/ 1 週×46 回　　③　40/ 1 週×46 回 ④　乳牛購入、 2 年後 1 万 6,000 タカで売却 ii　2003 年 ①　9,000 タカ ②　225/ 1 週×46 回　　③　20/ 1 週×46 回 ④　稲作（利益上がらない） iii　2004 年 ①　1 万 4,000 タカ ②　350/ 1 週×46 回 ④　オーストラリア産乳牛、 4 万 5,000 タカで購入、牛乳 20 ℓ/ 1 日、乾期 22-24 タカ/ 1 ℓ、雨期 30 タカ/ 1 ℓ で販売	①　家族構成員 夫　［2006 年］、夫、男児 3 歳［2010 年］ 元家族［2010 年］ 父　農業（土地所有） 母　家事労働 長女（本人） 長男　34　大学　マーケット(ダカ)で衣類関係の商売 二男　26　HSC　父親の農業手伝い 三男　22　HSC　自宅で衣類縫製 四男　21　ダカ大学 1 年生 五男　18　SSC 試験 二女　17　C10 六男　16　C10 ②　援助との関係　なし ③　近隣同士での支援関係　日常的にある

表 6　メンバー間での情報交換

事例	回　　答
1	生活の向上について。例えば「メンバーになってから生活が改善されましたね」とメンバー間で確認し合う。その他、「私は家禽を飼育しています。あなたはどのような生活をしていますか」等。
2	相互の生活状態を話して、生活を良くしてゆくためにはどうしたらよいのかを話し合う。
3	18 ヵ条の決心。不正を許さない。一所懸命仕事をして家族の生活状態を良くしよう。子どもを就学させよう。家族の人数を少なくしよう。家族計画について考えよう。
4	生活の向上。
5	現金収入の増やし方、子どもの教育、妊娠中に健康でいられる方法、妊娠中の被害、衛生的トイレの使用方法、井戸の使用。
6	融資の有効な活用方法、どのようなことで利益を得られるのか、あるいは損失を被るのか、子どもの育て方や教育。
7	研修内容。
8	養鶏についていろいろなことを聞かれる。その他にも相談を受けている。
9	経済状態の向上。家禽の飼育と現金収入を得る方法。野菜栽培。身体的清潔。
10	男性に出来ることは女性にも出来る。男女とも権利は対等である。ダウリーや早婚の問題他。

（注）事例 1 ～10 の番号は、表 5 の事例番号に対応している。
（出所）当該オフィスのメンバーからの聞き取り調査に基づき筆者作成。

② 就学経験のない貧困女性の参加過程

ⅰ VGF メンバーからショミティ・メンバーへ―夫の店開業

M（事例 1）の世帯は、屋敷地 12 ショタンショの他、農地は全く所有していない。融資を受ける以前の夫の職業は日傭の農業労働者で、雨期には仕事がなく、乾期の仕事も機械の普及から減少傾向にあった。そのため、1 年を通して現金収入や食料を得ることができず、ユニオン評議会より VGF（Vulnerable Group Feeding）メンバーとして指定され、約 4 年間に及んで 1 ヵ月に 10kg の米が支給されていた。そこで 2003 年頃、P.O. はこの家庭を訪問し、ショミティ・メンバーになることを勧めた。Mはすぐさま P.O. の話に関心を持ったが、融資を受ける際にサインが必要になることを知り愕然とした。その後 2 週間の研修を通して名前の読み書きを猛練習した。また、融資を受け取る際に紙幣の数え方を学んだ。当初は簡単な計算さえ出来なかったので、夫と相談して、最初の融資（6,000 タカ）を夫の店開業資金と子どもの教育費にあてた。この時、既に就学始期を過ぎていた長女をクラス 1 に就学させることができた。その後長女は順調に進級し、2006 年 3 月現在クラス 3（12 歳）に在籍している。Mは、ショミティ活動を通して子どもの就学・識字の必要性を認識しているが、とりわけ、これからは女児の教育に力を入れなければならないと考えるようになったと言う。彼女は「勉強しないと将来的にどうなってしまうのか。その大変さや悔しさが身にしみている。子どもたちにはこのような思いはさせたくない」と話している。また、夫が始めた店の売上金から 4,000 タカを支出して肉牛を購入し、数年後に 1 万 5000 タカで販売した。その頃、彼女の中に自信が芽生え始めた。

ⅱ 2 回目の融資活用状況―夫の店（資金）、売上金から牛購入

2 回目の融資（8,000 タカ）は、前回同様店の資金と教育費にあてた。そして、店の売上金の中から 6,000 タカで牛を購入し、2006 年 3 月現在も飼育している。

ⅲ 3 回目の融資―夫の店（資金）、家禽（アヒル、鶏、ヤギ）飼育

3 回目の融資（1 万タカ）も、これまで同様店の資金と子どもの教育費にあてたが、彼女自身の中で「何かをしたい」という気持ちが込み上げていた。この頃、簡単な計算も出来るようになっていた。このことを夫や P.O. に相談したうえで、家禽飼育を始めた。先ず、アヒルの卵（1 個 3 タ

表 7　子どもの就学・識字、子どもの労働に対する考え方（2006 年 3 月）

	回　　答
1	私たちが子どもの頃は、貧しくて就学することが出来なかった。そのため、メンバーになって融資を受けようとしてもサイン一つできず大変苦労した。就学機会を喪失すると、将来的には不便で困ることばかりである。そうした悔しさを身にもって体験しているがゆえ、子どもたちにはこのような思いをさせたくない。出来るだけ自分の勉強に励んで欲しい。
2	子どもの頃、貧しくて就学することが出来なかった。そのため、今とても困っている。眼があるのに文字を読めないのだから、まるで視覚障がいのようだ。あるいは、口があるのに話が出来ないようなものだ。こうしたことがとても悔しい。このような思いを子どもたちにさせたくない。子どもたちには出来るだけ教育を受けさせたい。
3	長男（18）は C8 まで、長女（15）は C10 まで就学させたので、二女（12）はそれ以上の教育を受けさせたいと思っていたが、成績が悪くて C7 で退学してしまった。これからは、子どもたち全員を就学させるべきで、女児も男児も出来るだけ勉強したほうが良い。
4	出来るだけ教育を受けさせたいと思っているが、長男（15）は勉強嫌いで、夫妻で厳しく叱責しても何ら効果がなかった。また、夫は長男、二男に続いて誕生した長女（最初の女児）を慈しんでおり「女児に恵まれるのは幸運なことだ。アッラーの思し召しなので大学まで行かせたい」と話している。
5	出来るだけ教育を受けさせたい。BRAC の活動は素晴らしいものなので、子どもには、将来、BRAC 職員が農村で行っているような仕事に就いて欲しいと願っている。
6	子どもの労働は絶対によくないことで、その子ども自身の将来を台無しにしてしまう。子どもたちには出来るだけ教育を受けさせたいが、長男（15）、二男（10）は成績がふるわない。とりわけ二男は勉強嫌い。この 2 人の男児に対して、長女（7）は成績も良く、詩の朗読や踊りも上手。出来れば、この長女を修士課程まで進学させたい。
7	子どもの労働は絶対に良いことではないので反対する。子どもたちには出来るだけ教育を受けさせたい。長女（6）は、C8 もしくは C9 まで就学させたい。長男（8）、次男（5）もその程度まで就学すれば充分。
8	もし可能であれば、自分の子どもは大学まで進学させたい。医師になって欲しい。子どもの労働について、良いことだとは思っていない。けれども、その家庭にとってどうしようもない状況があり、やむを得ず子どもを労働に出していると理解している。
9	（未婚）
10	これからの時代は、女児であれ、男児であれ、みな就学したほうが良い。出来るだけ勉強したほうが良い。それぞれの世帯で、貧困ゆえに就学できない状況があるのであれば、周囲でもそうした問題を一緒に考えて解決策を見出す必要がある。

（注）1：事例 1 ～10 の番号は、表 5 の事例番号に対応している。
　　2：C はクラスの略称。
（出所）当該オフィスのメンバーからの聞き取り調査に基づき筆者作成。

カ）を 10 個購入したが、8 羽が孵り、2 羽を 200 タカで売った（この孵化成功は彼女にとっての大きな喜びであり、眼を輝かせて話していた）。現在 12 羽のアヒルを飼育していて、余剰分の卵（1 日平均 7 個）を 1 個につき 4 タカで販売している。次に、1 羽 70 タカの鶏を 7 羽購入して飼育し、1 羽を 130～150 タカで販売した。残りの鶏は 1 日に 7 ～ 8 個の卵を産むため、半分を自家消費、残りを 1 個につき 4 タカで販売している。さらに、子ヤギ 2 頭（雌と雄）を 3,000 タカで購入したが、それらが順調に成長して子どもを産み、現在 7 匹のヤギを飼育している。母ヤギから牛乳を搾り子どもたちに飲ませているが、余剰分は、1 リットルにつき 30 タカで販売している。こうした家禽飼育や販売を通して、彼女の計算能力は向上している。何よりも、融資を受ける以前は、1

表 8　家庭内での決定権や生活状態の変化（2006 年 3 月）

事例	回　　答
1	夫妻間で話し合う機会が増えて家族関係が良くなった。
2	以前から、家庭内で何かを決める際には 2 人で話し合っていた。今では最終的には私が決める。
3	メンバーになる以前は経済的な問題を抱えていた。生活が向上してから夫の態度が優しくなった。
4	家庭内で何かを決める際、 2 人で話し合って決める。夫は、自分の勧めで妻がメンバーになったことをとても喜んでいる（妻は C3 まで就学、夫は不就学で耳に障がいがある。聞き取り調査は夫妻同席で行ったが、妻の発言回数のほうが圧倒的に多かった。その発言に対して、夫が異議を唱えることはなかった）。
5	妻は子どもの教育に熱心になった。妻の発案で就学期にある子ども 3 人の家庭教師を雇用。妻の意見で家屋建設、トイレ新設。長男（18）が、融資を活用して開業した店を手伝うようになった。長男の就業機会にもつながった。
6	ショミティ活動を通して刺激を受け、経済的に夫に依存するだけではなく、自分自身でも何かをしたいと強く思うようになった。その際、夫が相談にのってくれた。 2 人の会話が増え、最近では、夫が妻に相談する機会も増えた。子どもをどのように育てるのかということについて、以前よりも考えるようになった。女児の就学・識字への関心が高まった。長女を修士課程まで進学させたいという妻の意見を夫は理解し賛成している。
7	家庭内で何かを決める際、以前は夫が 1 人で決めていた。今では、夫妻で話し合って決めている。
8	何かをしなければ、勉強しなければと思いにかられるようになった。復学して、家庭教師、小学校のベンガル語教師も務めている。農村内で養鶏に関する相談を受けている。
9	エンタープライズ研修で、事例 10 の Ra より刺激を受ける
10	農村内の社会問題への意識が明確になる。ユニオン評議会議長の反対を押し切ってショミティを組織化し、BRAC 保健ボランティアとなる。2010 年 1 月現在、エンタープライズ・メンバーとして、また、現地 NGO 職員としてダウリーや早婚の問題を訴えている。

（注）事例 1 ～10 の番号は、表 5 の事例番号に対応している。
（出所）当該オフィスのメンバーからの聞き取り調査に基づき筆者作成。

年を通して現金収入や食料を得られないという問題を抱えていたが、2006 年 3 月現在、 1 ヵ月につき約 1,000 タカの余裕がある。

iv　まとめ

この事例から、不就学であったM自身がショミティ活動や融資の活用を通して識字を獲得し、自分自身に力をつけてきた経緯がみて取れる。そして、それらは子どもの就学・識字状況に大きな影響を及ぼしていることが分かる。

5．まとめ

本稿は、バングラデシュの現地 NGO の中で最大規模を誇り、農村でより多くの貧困女性を対象として総合的なアプローチを展開している「学習する組織」としての BRAC に焦点をあて、先行研究の分析及び農村での現地調査を踏まえて、クミッラ県ダウドゥカンディ郡の農村で社会開発に携わる職員と具体的な活動状況、そして、貧困女性の参加状況を明らかにしている。

当該地域で BRAC が活動を開始したのは 2000 年になってからである。それ以降、職員は農村内に入り、援助・開発では末端におかれてきた貧困女性との対話を先ずもって優先している。そして、伝統的な相互扶助関係を媒介として草の根から貧困層を組織化し、ショミティを通して、就学・識字、ダウリー撲滅、少額融資貸付といった社会開発過程に貧困層が参加するプロセスを重視している。政府との共同事業にしても、それまで行われてきた上から下への援助を見直し、貧困女性の well-being 向上や参加に結びつくような方法へと改善している。さらに、援助や開発によっ

てユニオン評議会議長・議員に集中した権限の分散化を図ろうとしている。職員による BRAC の志望動機は、必ずしも、貧困層の well-being 向上に尽力する、あるいは、農村の社会開発を推進する、といったものではないが、貧困層と向き合う中で、職員自身も農村の社会開発への問題意識を高めている。

また、BRAC は農村に居住する貧困層を直接的な受益者としてきたことのみならず、当事者の well-being 実現に向けた活動のあり方を常に学習し、検討し続けている。そこでは、貧困層を無力な存在として位置づけたり、ただ単に物資を供与したりといった方法は採っていない。それは、外国主導による援助や開発のあり方を根本的に問い直すという営みでもある。そのうえ、BRAC による活動への参加者は年々増加傾向にある。草の根から貧困女性を組織化し、彼女たち自らの参加を重視する BRAC の開発手法は、近代化論やトリックル・ダウン仮説を拠り所とする外国主導の開発とは異なっている。ここに我々は、近代化論と対抗関係にある内発的発展論の事例をみてとることができる。

さいごに、本研究の限界も示しておかなければならない。同郡での BRAC の活動状況や貧困層の参加状況をより明らかにするためには、やはり長期間現地に滞在して調査を行う必要がある。また、同郡の貧困層が BRAC の開発過程にどのように参加しているのかをより明らかにするために、メンバーの戸別訪問及び聞き取り調査を継続している。改めて報告の機会を設けたい。

付記

1999 年から 2010 年までの調査は、 4 度に及ぶ文部科学省科学研究費（①バングラデシュへの援助と社会開発―識字への取り組みを中心として［1999–2001 年度］、②バングラデシュにおける児童労働とその対策に関する実態調査［2002–2004 年度］、③バングラデシュの農村における貧困層への援助と社会開発―クミッラ県での実態調査［2005–2007 年度］）、④バングラデシュの内発的発展―クミッラ県ダウドゥカンディ郡での実態調査［2008–2010 年度］の助成（研究代表者；鈴木弥生、 共同研究者；佐藤一彦［1999～2006 年度］、増子正［2007 年度］により実施している。

注記

(1) 経費実績ベースで、その内訳は日本 ODA が 68 億 5641 万ドル、アメリカ ODA が 35 億 5034 万ドルとなっている（Economic Relations Division, 2008：p. 97 and p. 113）。なお、バングラデシュの会計年度は 7 月から翌年 6 月までである。

(2) ショバンは、1980 年代初期の段階から既に「外国援助による開発が貧富格差を拡大し、バングラデシュ経済の脆弱性を増大させ、ますます対外援助を増幅させる。また、バングラデシュの経済的自立、自力更生を困難にする」と警告していた（Sobhan 1982）。

(3) 第 1 次 5 カ年計画（1973–78 年）から第 5 次 5 カ年計画（1997–2002 年）まで、貧困緩和、雇用創出他が目標として掲げられている（Planning Commission 1978, 1980, 1985, 1990 and 1998, Hye 1996）。第 6 次 5 カ年計画（2010 年 7 月～2015 年 6 月）では、絶対的貧困層の割合（40%）を 2021 年までに 15% に減少させることが目標とされている（Financial Express, August 19, 2009）。

(4) 絶対的貧困層の人口割合は依然として都市よりも農村に多く、2000 年には全体の 76.3% を占めている（BBS 2005, p. 719）。この統計では、絶対的貧困の測定方法として、DCI（Direct Calorie Intake）法と CBN（Cost of Basic Needs）法を採用している（BBS 2005, pp. 824–825）。DCI 法は世帯構成員 1 人当たりのカロリー摂取量（1 日）を基準としており、最貧困層（hardcore poor）は 1,805kcal、絶対的貧困層が 2,122kcal となっている。CBN 法は世帯構成員 1 人当たりに必要とされる費用の中で、既定のカロリー所要量に相当する食料品の購入費用と基本的ニーズを満たす非食料品の購入費用（1 ヵ月）を算出し、それらの合計から貧困ラインを設定する。ここでは、最低ライン（lower poverty line）とその少し上のライン（upper poverty line）が算出され、後者以下が絶対的貧困者とされている。なお、絶対的貧困層の割合について、BBS 最新の統計書（2008）でも同データしか記載されていない。

(5) BRAC は、Bangladesh Rural Advancement Committee（バングラデシュ農村振興委員会）の略語であったが、近年バングラデシュの都市やアフガニスタン（2002 年～）、スリランカ（2004 年～）、タンザニア、ウガンダ、南スーダン（以

上2006年～）等の第三国でも活動しているため、略語のBRACのみを組織名として使用している。

(6) コーテンは、BRACの他、Indian National Dairy Development Board, Sri Lankan Sarvodaya Shramadana Movement, Thailand Community Based Family Planning Services, Philippine National Irrigation Administration Communal Irrigation Programを成功例として紹介している（Korten 1980）。

(7) 「学習する組織」について、ラヴェルは、コーテンの他、チェン、センゲの先行研究を引き、センゲの「学習する組織の5つの特徴がBRACの運営方式と一致すると考えられる」とも述べている（Lovell 1992, pp. 175–176）。

(8) マイクロファイナンスとは「融資と貯蓄等を組み合わせた小金融サービスで、現金や手数料を得るために、これらを活用して小事業を行う」ことである（Robinson 2001：p. 9–10）。本稿では、基本的にはマイクロファイナンスを使用するが、出典がマイクロクレジット（少額融資）の場合、それを使用している。

(9) 2006年3月、BRACヘッド・オフィスでの聞き取り調査による。実際の外国援助額割合（推移）をみると、1980年当時全活動は外国援助によって行われていたが、1990年に約7割、1995年に約5割、1998年に約3割、2000年～2007年まで約2割（但し2006年は3割）まで減少している（BRAC 2002, 2004, 2006, 2007a）。また、2007年の収入内訳は、メンバーへの融資利子が36.8%と最も多く、次いで外国援助（29.5%）、収入創出事業（17.1%）、プログラム支援事業（11.3%）、関連事業（BRAC銀行、BRAC大学、インターネットサービス・プロバイダー、ソフトウェアー開発、不動産業）への投資（3.6%）、その他（1.3%）、賃貸料（0.4%）となっている（BRAC 2007a, p. 71より筆者算出）。これらの収入総額は、151億8868万6941タカにも達している。こうした収入についてShoishab Bangladesh（子どものメイドを取り巻く社会問題と対峙する現地NGO）は、「貧困緩和に向けた多くの活動を推進するうえで有益である。我々はこうした活動を導入していないので、創設以来、常に資金確保が課題となっている。バングラデシュ政府の助成金には多くの制限があり、我々の立場を主張しても対立するだけである」と述べている（2009年3月）。

(10) アーロンで販売している手工芸品や衣類は斬新で、中間層や富裕層間での人気は高い。但し高価格であるため、店内で貧困層をみることはない。そのため、否定的なイメージを抱いている人々も少なからずみられる。しかし、それらの人々の大半は、農村でのBRACの活動に直接触れたことはない。

(11) Goetzらは、西欧フェミニズムの観点から、融資のコントロールとエンパワメントの関連性に焦点をあて、女性自らが融資活用における全過程に関わることのできる能力をエンパワメントとしている。調査は、BRACの他、グラミン銀行、RD（Rural Development）-12と女性のための現地NGO（2ヵ所）の計5ヵ所で調査している。

(12) KhandkerもBRACの他、グラミン銀行とRD-12に焦点をあて、マイクロクレジットの有効性を検証している。

(13) AlamgirもBRACを含む現地NGOとグラミン銀行によるマイクロクレジットの有効性について検証している。Alamgirは、マイクロクレジットの有効性を認めているが、最貧困層には届きにくいことを指摘している。これに対して、BRACのIGVGD（本文参照）を最貧困層の生活状態に適したプログラムであると評価している。

(14) クミッラ県には東パキスタン時代の1960年代から米主導の「コミラモデル」が導入され、緑の革命がいち早く導入・拡大した。このモデルは、BARD（Bangladesh Academy for Rural Development；バングラデシュ農村開発アカデミー）初代代表のカーン（Khan, Akter Hamid）によって実施された農村開発であるという一国内的な枠内でのとらえ方が主流であった。確かに、カーンは1960年代にコミラモデル推進のために、東パキスタンの地で多収穫新品種の普及・拡大に尽力していた（クミッラ県コトワリ郡農村での調査による）。それ以前の1958年には、カーン自身がミシガン州立大学で9ヶ月間の研修を受け、また、6週間に及んでヨーロッパとアジアの農村開発プログラムを見学している。その後BARDでは、農村の近代化を目的とする研修が繰り返し実施されたが、米議会図書館には、これら研修内容（資料）の一部が保管されている（Comilla-US AID Conference Report：1963）。こうした背景だけみても、アメリカの関与がコミラモデルの構想や具体的手法を大きく左右していたと考えられる。なお、鈴木：2007

参照。独立後には、ダウドゥカンディ郡を主たる対象とする「モデル農村開発計画」（日本 ODA）によって農村の近代化が促進されている。詳細は、鈴木・佐藤 2008 参照。なお、クミッラ（Kumilla）はベンガル語であるのに対して、コミラ（Comilla）は英語的慣用表記である。コミラモデルは米主導の開発であるという性格を示すため、本稿では敢えて「コミラモデル」と表記している。また、BARD は、バングラデシュの独立以前には PARD（Pakistan Academy for Rural Development；パキスタン農村開発アカデミー）であったが、煩雑さを回避するため、本稿では BARD を使用している。

⑮ その他、広域オフィス・研修センター（クミッラ県コトワリ郡）、じゃがいも貯蔵庫、MERA（Micro-Enterprise Lending and Assistance）が支援する製釘工場と繊維屑工場（以上ダウドゥカンディ）を訪問し、職員とメンバーから聞き取り調査を行っている。

⑯ ダウドゥカンディ郡の BRAC エリア・オフィスと ASA エリア・オフィスでの聞き取り調査による（2007～2010 年）。なお、当該地域でのグラミン銀行の活動と女性の参加状況については、鈴木 2010 参照。

⑰ ダウドゥカンディ郡の BRAC エリア・オフィスでの聞き取り調査（2009 年 3 月）による。河川の浸食による影響から、ユニオン数は年度によって異なる。それに伴い、人口も変化する。例えば、2008 年 1 月時点で、総人口 86 万 2213 人、28 ユニオン、504 村（同オフィスでの調査）、2001 年は総人口 450,052 人（女性 223,889 人、男性 226,163 人）、総世帯数 83,245 世帯、22 ユニオン、399 村であった（BBS 2006, p. 33 and p. 157）。

⑱ DABI は claim、demand、right 等を意味するベンガル語である（Rahman et al. 2005, p. 423）。BRAC の活動では、農村に居住する貧困女性の権利、あるいは、当然の権利としての要求を尊重するための基礎的なプログラムの一つとして位置づけられている。

⑲ 1997 年 8 月は 1 ドル 46 タカ前後であったが、2008 年 1 月現在、1 ドル 68 タカ前後となっている（首都ダカで両替した際のレートによる）。

⑳ DABI の他、小農、若しくは僅かな農地しか所有していない貧困女性を対象とする ED（Enterprise Development；融資額は 1 年間で 3 万～ 5 万タカ）や小規模企業を支援する MELA（Micro Enterprise Lending and Assintance；融資額は 1 年間で 5 万～30 万タカ）がある。当該オフィスでは、MELA 融資利用者の 98% が男性となっている。

㉑ DABI 担当の P.O. は午前 6 時 30 分に出勤し、記録の確認や職員間での打ち合わせを行う。その後 2 ヵ所のショミティを訪問し、メンバーと共に誓いの言葉を述べてから融資返済額を回収したり、メンバーの相談に応じたりする。休憩（昼食）時間は 12 時～14 時 45 分頃までとなっていて、自宅で休むこともできる。その後、再び農村内をまわったり、職員間での打ち合わせを行ったりして 17 時に一日の仕事を終える。ショミティ訪問は基本的に 1 日 2 ヵ所、1 週間に 12 ヵ所となっている。ヘッド・オフィス職員は週休 2 日であるが、当該オフィス職員は「週休 2 日では農村のフィールドワークに支障をきたす」と回答している。

㉒ 2008 年 1 月現在、エリア・オフィス職員 31 人の内、女性 9 人と約 3 分の 1 を占めている。

㉓ 2007 年 12 月、彼はM県ブランチ・オフィスのマネージャーを務め「より責任のある業務を行う中で充実した日々を過ごしている」と回答したが、彼が担当していたエンタープライズ・メンバー（本文と表 5 の事例 10）は「彼の転勤を残念に思っている」と述べている。

㉔ 当該地域では、農地借用に際して、ポッシャニとボルガという方法が一般的となっている。前者は、1 シーズンごと借地代を現金で支払い、全収穫物を借地者が所有する。後者は、借地者が地代として収穫物の半分を提供する。 ただし、栽培に関する一切の費用は借地者が負担する。バングラデシュ全土では後者の方法が伝統的であったが、 当該地域では、 収穫物の分配が面倒、現金収入が必要等の理由から、ポッシャニを好む地主が増えているということである。こうした慣習や用語は、地域によっても違いがみられる（現地の聞き取り調査による）。

参考文献

Abed, Fazil Hassan. 2003. *The Emergence of NGOs in Bangladesh A BRAC Respective*, 20th year of Dhaka Courier, Dhaka Courier November 2003.

Ahmed Salahuddin, 1991, Sobhan Rehman eds. 1991. *The Role of NGO, Report of the Task Force on*

Bangladesh Development Strategies for the 1990's, Managing the Development Process―Volume 2, University Press Limited；Dhaka.

Alamgir, Dewan A.H. 1999. *Microfinancial Services in Bangladesh*, Credit and Development Forum.

安藤和雄、1998、「NGOの発展を支える在地性（バングラデシュ）」斉藤千宏、『NGOが変える南アジア』コモンズ、155–191頁。

Asia Development Bank. 2007. *Proposed Technical Assistance Loan People's Republic of Bangladesh: Padma Multipurpose Bridge Design Project*, Report and Recommendation of the President to the Board of Directors.

Bangladesh Bureau of Statistics. 2005. *Statistical Yearbook of Bangladesh 2004*.

Bangladesh Bureau of Statistics. 2006. *Population Census–2001, Community Series, ZILA: Comilla*.

Bangladesh Bureau of Statistics. 2008. *Statistical Yearbook of Bangladesh 2007*.

BRAC. 2002. *Annual Report 2002*.

BRAC. 2004. *Annual Report 2004*.

BRAC. 2006. *Annual Report 2006*.

BRAC. 2007a. *Annual Report 2007*.

BRAC. 2007b. *BRAC Diary 2008*.

Chowdhury, A. Mushtaque R. and Bhuiya, *Abbas*. 2004. *The Wider Impacts of BRAC Alleviation Programme in Bangladesh, Journal of International Development*, Vol. 16; Part 3. pp. 369–386.

Comilla-US AID Conference Report, Pakistan Academy for Rural Development Comilla, June 11–14, 1963.

Economic Relations Division. 2008. Ministry of Finance. *Flow of External Resources into Bangladesh*, April.

Financial Express, August 19, 2009. *High Profile Meet on 6th Five-Year Plan Today.*(*http://www.thefinancialexpress-bd.com/2009/08/19/76563.html*)

Goetz, Anne Marie and Gupta, Rina Sen. 1996. *Who Takes the Credit? Gender, Power and Control over Loan Use in Rural Credit Programs in Bangladesh*, World Development, 24(1), 45–63.

Hadi, A. 2002. *Integration Prevention of BRAC Respiratory Infections with Micro-credit Programme: Experience of BRAC*, Bangladesh, Public Health, Vol. 116, Issue 4. pp. 238–244.

Hadi, A. 2003. *Management of Acute Respiratory Infections by Community Health Volunteers: Experience of Bangladesh Rural Advancement Committee (BRAC)*, Bulletin-World Health Organization, Vol. 82, Part 3.

Hye, Abdul Hasnat. 1993. *Cooperative-Comilla and After*. Bangladesh Academy of Rural Development Comilla.

Hye, Abdul Hasnat. 1996. *Below the Line-Rural Poverty in Bangladesh*, Dhaka: University Limited.

Khan, Akhter Hameed. 1968a. *Works Program in East Pakistan―A Case Study*, Pakistan Academy for Rural Development Comilla.

Khan, Akter Hameed. 1968b. *Works Program in East Pakistan―A Case Study*, Pakistan Academy for Rural Development.

Khan, Akhter Hameed. 1969. *A Cooperative Farming Project in Comilla (January 1968―June-1968)*, Pakistan Academy for Rural Development Comilla.

Khan, Akter Hameed. 1971. *Tour of Twenty Thanas Impressions of Drainage-roads, Irrigation and Cooperative Programmes*, Bangladesh Academy for Rural Development Kotobari, Comilla.

Khan, Akhter Hameed. 1977. *Comilla Revisited, May–June 1977*, Department of Agricultural Economics, Michigan State University.

Khan, Islam Nurul, 1977. *Bangladesh District Gazetteers Comilla*, Dacca: Bangladesh Government Press.

Kahndker, Shahidur R. 1998. *Fighting Poverty with Microcredit: Experience in Bangladesh*, University Press Limited: Dhaka.

Khatun, M. Stenlund, H. Hornell, A. 2004. *BRAC Initiative towards Promoting and Social Equity in Health: A Longitudinal Study of Child Growth in Matlab Bangladesh*, Vol. 7; Num. 8.

Korten, C. David. 1980. *Community Organization and Rural Development: A Learning Process Approach*, A Ford Foundation Reprint from Public Administration Review.

Lovell, H. Catherine. 1992. *Breaking the Cycle of Poverty The BRAC Strategy*.（＝2001、久木田由貴子・久木田純訳、『マネジメント・開発・NGO―「学習する組織」BRACの貧困撲滅戦略』新評論。

Mahbub, T. 2008. *Inclusive Education at a BRAC School―Perspectives from the Children, British*

Journal of Special Education, Vol. 35. No. 1. pp. 33–41.

峯陽一、1995、「開発における NGO の役割」本山美彦編著、『開発論のフロンティア』同文館、227–252 頁。

Mutith, M.A. 1992. *Bangladesh—Emergence of a Nation*, Dhaka: University Press Limited.

Naomi, Hossain and Matin, Imran. June 2007. *Engaging Elite Support for the Poorest? BRAC's Targeted Ultra Poor Programme for Rural Women in Bangladesh*, Development in Practice, Vol. 17. No. 3. pp. 380–392.

西川潤、1989、「内発的発展論の起源と今日的意義」鶴見和子・川田侃、『内発的発展論』東京大学出版会、3–41 頁。

西川潤、2000、『人間のための経済学』岩波書店。

西川潤編著、2001、『アジアの内発的発展』藤原書店。

西川潤、2003、「人間と開発—内発的発展による共生社会への展望」『早稲田大学政治経済学雑誌』第 252・253 号、1–29 頁。

西川潤、2007、「世界経済を展望する—グローバル化に拮抗する地域主義—」『政策研究ファーラム』558 号、40–43 頁。

延末謙一、2001、「バングラデシュ—巨大なるサードセクターと巨大化 NGO」重富真一編著、『アジアの国家と NGO—15 ヵ国の比較研究—』明石書店、42–67 頁。

大橋正明、1996、「開発援助と NGO 論」佐藤寛編『援助研究入門—援助現象への学際的アプローチ』アジア経済研究所、73–102 頁。

Planning Commission. 1978. *The Fifth Five Year Plan 1978–1980,* Ministry of Planning.

Planning Commission. 1980. *The Fifth Five Year Plan 1980–1985,* Ministry of Planning.

Planning Commission. 1985. *The Fifth Five Year Plan 1985–1990,* Ministry of Planning.

Planning Commission. 1990. *The Fifth Five Year Plan 1990–1995,* Ministry of Planning.

Planning Commission. 1998. *The Fifth Five Year Plan 1997–2002,* Ministry of Planning.

Rahman, Muzibur and Monir, Khairul Alam eds. 2005. *Oxford Learner's Favorite Dictionary Bengali to English*. Chowdhury and Son's.

Rao, Arua and Kelleher, David. May 1998. *Gender Lost and Gender Found: BRAC's Gender Quality Action-Learning Programme,* Development in Practice, Vol. 8. No. 2. pp. 173–185.

Robinson, Marguerite, S. 2001. *The Microfinance Revolution, Sustainable Finance for the Poor*, World Bank; Washington, D.C.

Senge, Peter M. 1990. *The Fifth Discipline: Tha Art and Practice of the Learning Organization*, Doubleday, Random House, Currency.

Sobhan, Rehman. 1982. *The Crisis of External Dependence,* Dhaka: University Press Limited.

Sultan, K. M. Tipu. 1969. *The Works Programme in East Pakistan*, Pakistan Academy for Rural Development, Comilla, East Pakistan.

鈴木弥生、2007、「バングラデシュのコミラモデル—先進国が持ちこむ農村開発の虚実」西川潤編著『社会科学を再構築する—地球平和と内発的発展』明石書店、117–136 頁。

鈴木弥生、2010、「グラミン銀行による貧困女性の組織化とエンパワメント」『社会福祉学』日本社会福祉学会、第 51 巻、第 3 号、44–63 頁。

鈴木弥生・佐藤一彦、2000、「バングラデシュにおける日本の援助と農村開発—モデル農村開発計画の実施状況—」『研究所報』秋田桂城短期大学地域総合研究所、第 3 号、117–142 頁。

鈴木弥生・佐藤一彦、2008、「バングラデシュクミッラ県における貧困層の生活状態—モデル農村開発計画によるインパクト」『社会福祉学』日本社会福祉学会、第 49 巻、第 2 号、135–149 頁。

鶴見和子、1976、「国際関係と近代化・発展論」武者小路公秀・横山道雄編、『国際学—理論と展望』東京大学出版会、56–75 頁。

鶴見和子、1991、「内発的発展論の原型—費孝通と柳田国男の比較」宇野重明・朱道華、『農村地域の近代化と内発的発展論—日中「小城鎮」共同研究』国際書院、75–150 頁。

鶴見和子、1996、『内発的発展論の展開』筑摩書房。

Abstract

Social Development in Rural Bangladesh: The Organization for Poor Women by BRAC

Yayoi SUZUKI
Rikkyo University, Department of Community Development
E-mail：yayoiasha@rikkyo.ac.jp

Kazuhiko SATO
Former, Akita Keijo Junior College
E-mail：satok52@yahoo.co.jp

The purpose of this study is to examine the social development of poor women in rural Bangladesh. Our research is based on previous studies and interviews conducted during 1997–2010. The primary focus of this study is BRAC's social development programme for poor rural women in Daudkandi Thana, Kumilla District.

BRAC is one of the largest NGOs in Bangladesh. It launched a social development programme in Daudkandi Thana in 2000. The programme officers, who are staff members of BRAC, initiated talks with poor rural women who have been excluded from the foreign-aid-funded rural development projects in the area. They recognize that poor women at the bottom of the social scale are poor women who are illiterate, and as a result, their children are victims of the widening gap between the rich and poor. The programme officers believed that poor women will be able to become independent if they are provided with adequate support. Therefore, they have worked with poor women, to organize a samity (village organization) which is at the core of the social development programme. Once samity has been established, samity members are made aware of the extent of social problems around them by BRAC's consciousness raising programme. They have also been participating in the social development programme that helped reduce their vulnerability.

BRAC organizes poor women at the grass-roots level and raises their social awareness. BRAC's unique, holistic approach towards poverty reduction and empowerment of poor women is different from those adopted by other institutions providing foreign aids, which are emblematic of the modernization theory in context to their assumptions and effectiveness of the trickledown effect. Therefore, in this paper, we also explore case studies that prove the endogenous development theory to be valid.